

佐賀縣では大正十三年より風の抗争歴史を待つものである。二、一五、四、一六、八、一、一。中間選挙等々其他の弾壓十數度滿身脱皮か血を浴び乍らも我等は常に之に堪へ、更に之を厭つて實業小作農氏の先頭に立ちて闘ひ進んで來てゐる。此の様な多大なる組織を打ちながら闘争は分散的になされてゐる然し乍ら労働運動農民運動戦線に於て全體的に戦線統一が叫ばれてゐる。だが我々は名目のみの従ひなる統一は欲しない。我々達の戦線統一は農民戦線の擴大であり、強化でなければならぬ。資本家地主の攻撃に對する陣營の闘争化であり、小作本をマケロ、土地と農民の目的貫徹のためであり、日常利益のヨロコ仲長のためである。そして農民大衆の下からの闘争を地じたる統一で行はばならぬ。我々はそのためにならざる農民の日常利益を取り上げて闘つてゐる。

過去の闘争批判

我々は労働農民の日常利益のためは勿論、小作本激死、土地引上げ、農産物運反動、農産物押初件、被買闘争等々幾多の場面に於いて大衆的に闘はれて來たが、未だ組織が全體的統一の闘争に於いてない。即ち政治的闘争の場面に於いて殊に小充分でメーデー、四手杯救、の闘争が常に立ちおくれの状態にある。かくの如き政治闘争の立ちオクレ、小充分さは、農民運動、プロレタリア運動に對する態度の小充分と、戦術戦術の問題が徹底的に論議、討究されてゐないことが原因であらう。農産物運の暴化に伴ふ支配階級の激突、弾壓攻撃の推移と共に常に方法的戦術、戦術が我々の統制ある組織に於いて具体化されねばならぬ。然るに地盤及び支部に於てその戦術、戦術が具体化されて闘争はれてゐなかつた。斯の如きことが闘争を衰微へみちびいたのであ